

説教 『そのとき』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 35:5~6/マタイによる福音書 9:1~8

「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う(イザヤ 35:4~6a)。「そのとき」とは神の国が到来する「とき」。「見えない、聞こえない、歩けない、喋れない」とは身体の障害か、疾病か、老いの衰えか。それともバビロニアに捕囚された民の比喩なのか。預言は「荒れ野に水が湧きいで、荒れ地に川が流れる(35:6b)」と続くから比喩だろう。かといって、実際に目が開け、鹿のように躍り上がるよりも「小さな現実」ではない。むしろ逆、世が根っこから変革されるいっそう「大きな現実」だ。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた(イザヤ 9:1,マタイ 4:16)」。イザヤの預言はイエスによって実際に開かれ、「そのときから、イエスは、[悔い改めよ。天の国は近づいた]と言って、宣べ伝え始められた(マタイ 4:17)」。イエスは「そのとき=終りの日」を体現し、推し進め始める。「そのとき」は今なお継続しており、私たちは変革する「そのとき」のただ中であって、神の国が完成する日を待ち望んでいる。こう言うと、漠として抽象的な感じだが、確かな現実である。

イエスが「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい(マタイ 9:6b)」と命ずると、中風の人には回復してその通りにした(9:7)。預言は「そのとき」成就する。「人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、[子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される]と言われた(9:2)」。イエスは「病者とその隣人の信仰」両方に注目する。私たちはこのどちらか。病者を連れて来る隣人か、隣人に助けられ「そのとき」に迎え入れられる病者か。

病者の回復は、本人ではない隣人の信仰と結びついている(9:2)。私たちはこの両者だろう。私たち自身、隣人の信仰に導かれてキリストに出会い、労を惜しまずキリストの許へ隣人を連れて行くことがあるのだから。ここに教会の源流がじわり滲み出ている。隣人が中風の病であったがゆえに、人々はイエスの許へやって来た。また隣人の信仰があったがゆえに、病者は解放されるきっかけを得た。

病者を解き放つ言葉を「神への冒瀆(9:3)」だとする信仰の権威者にイエスは厳しく問う。「[あなたの罪は赦される]と言うのと、[起きて歩け]と言うのと、どちらが易しいか(9:5)」。前者は根本的だが見えない。後者は現象として現われる。「罪が赦される」なら「起きて歩く」ことは容易い。隣人の苦しみをせず、虎の威としての権威に頼る信仰者には分かるまい。イエスは、身動きできなかった者を「力ある言葉」で解き放ち、責任を持たせ(床を担ぐ)、本来あるべき姿へと回帰させた(家に帰る 9:7)。

イエスは病者に「子よ、元気を出しなさい(9:2)」と慰め、彼の苦しみを受け取り、硬化した彼の絶望に風穴が開いた。その風穴から彼の深部へ、「あなたの罪(複数)は赦される(9:2)」という宣言が吹き込む。世の罪(複数)もまた、あたかも病者のように赦され、預言者の言葉通りに人々は立ち上がる。

「そのとき(イザヤ 35:5~6)」イエスによって扉が開かれた(マタイ 4:17)。今なお扉は開かれていて、聖霊(風)がここを吹き抜けていく。聖霊によって私たちは、真実を見、聞き、歩き、語る(イザヤ 35:5~6)。



【おまけのひとこと】

最突端の「そのとき」 未来からの向かい風を受けている 前方の混沌は次々に形となり 今を吹き抜けていく 後方へ流れゆく出来事が歴史か キリストはあつとふり返ることで自覚されるらしい